

ふたば未来学園高校が目指す

「未来」を創る学校

2015年4月、福島県双葉郡広野町に新たな学校が誕生しました。福島県立ふたば未来学園高校。校名が示す通り、地域の復興を担い、未来を創る人材を育む学校です。誕生の経緯と、同校が描く未来像について、開校直前の3月末に取材しました。

取材文／堀水潤 撮影／高松英昭



未来像から逆算して誕生した 新たな中高一貫校

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から4年が経った今年4月、福島第一原発の南方20キロメートル以遠に位置する福島県双葉郡広野町に、新たな高校が開校した。福島県立ふたば未来学園高校である。連携型中高一貫校として、双葉郡（広野町、楢葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村）出身の中学生を中心に受け入れ、地域の復興を担い、社会に貢献できる「強さ」をもった人材を育成することが目標だ。

1期生は152人。震災時、小学5年生だった学年である。丹野純一校長（写真中央）は次のように話す。

「ひと言では表せない辛い体験をした子どもたちです。けれど、新しい学校に希望を見いだし入学してくれた子どもたちでもありません。志望理由の言葉に、故郷への想いや、この経験を地域の復興に役立てたい、という強い意志があふれていることに驚かされました」

そう丹野校長が話すように、震災後、双葉郡の児童・生徒は大変な日々を過ごしてきた。ここで、双葉郡の学校の現状と、ふたば未来学園が誕生した経緯を簡単に振り返ってみる。

震災後、双葉郡の8町村にあった小・中学校は、会津若松市や二本松市、いわき市ほか県内各地の避難先の仮設校舎などで、大変な苦勞を伴いながら授業を再開させた。その後、避難

指示が解除され帰村・帰町がなくなった川内村と広野町を除き、現在も避難先での学校運営が続いている。郡内にあった5つの県立高校も、本来の場所から離れた土地でサテライト校として運営されてきた。いずれも生徒数は震災前に遠く及ばない。

そのような状況下、各町村ではそれぞれ教育環境の整備に努めてきたが単独の動きでは限界がある。双葉地区の教育長会などで、町村の枠を越えて教育復興に取り組もうという声が高まり、県や国と議論を深めるなか、13年に「双葉郡教育復興ビジョン」を取りまとめた。その具体策の筆頭にあがったのが中高一貫校の設置であった。初期の議論では、各町村が直面する喫緊の課題の解決が中心であ

ったが、地域の将来に思いをはせ、そのためにも今のような人材を育てる必要があるか、という議論に発展するなかで生まれた未来志向の発想であったという。

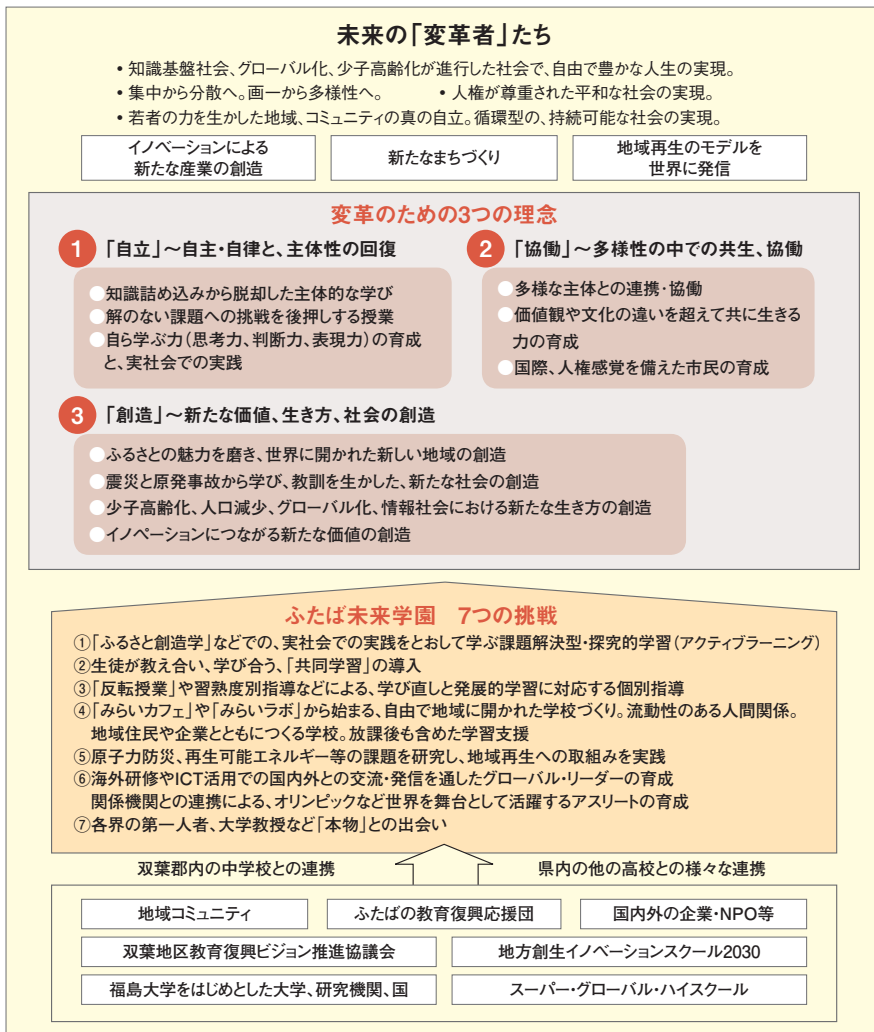
「日常を取り戻すという話だけではなく、この地域だからその前例のない思い切った教育をという議論の流れのなかで生まれた構想でした」

そう語るの、ふたば未来学園の南郷市兵副校長（写真左）だ。震災前年、大手通信会社から縁あって文部科学省に出向。震災対応に奔走するなか任期の3年が過ぎると同時に本籍の企業を退職し、公募試験を経て文科省に専門職として採用された変わり種だ。

氏は、文科省が推進する「創造的

図1 ふたば未来学園の未来創造型教育

※学校資料をベースに編集部で作成



復興教育(自ら学び、実行する力を育むなど、復興を担う人材の育成を目的とした特色ある教育)のキーパーソンとして、「OECD東北スクール」(※1)や「全国生徒会サミット」(※2)をはじめとしたさまざまな教育実践に関わってきた。そこで培ったネットワークや国との連携を期待され、36歳の若さで、福島県では初となる副

校長に就任した。丹野校長は、南郷副校長をこう評する。「文科省の職員でありながら、教員以上に先生らしい人。子どもたちの力を信頼している人です。他にない先進的な教育に取り組むため企画開発の中心として、また外部との連携を担うコーディネーターとしての役割を期待しています」

新たな学校づくりにおいては、双葉地区教育長会が13年度に始めた「双葉郡子供未来会議」での知見が生かされた。子どもと大人がテーブルを囲み、双葉郡の教育復興について自由に対話する場だ。全8回、各地で行われた会議には延べ556人が参加。理想の授業については活発な意見交換が行われたほか、新校名の選定などにも積極的にかかわった。

「大人の議論ではまともでないことも多かったなか、『子どもたちはどう考えているのだろう』という発想から設けた場でした。子どもたちからで

●●●●●
「ふるさと創造学という「動く授業」」

理想の授業についての率直な意見に驚かされました(南郷副校長)

●「机に縛られる勉強だけじゃなくて、実際に体験したり、生徒同士で教え合うような『動く授業』がいい」

●「いろいろな職業のプロに出会って自分なりの夢を見つけられる『小さな窓』がたくさんあってほしい」

●「未来に誇れる街づくりをしたいから、地域の歴史や伝統文化について学びたい」

こうした発言はブランドデザインを作るうえで大きなヒントになった。事実、ふたば未来学園では、課題解決型のアクティブラーニングなどを積極的に取り入れる予定だ。

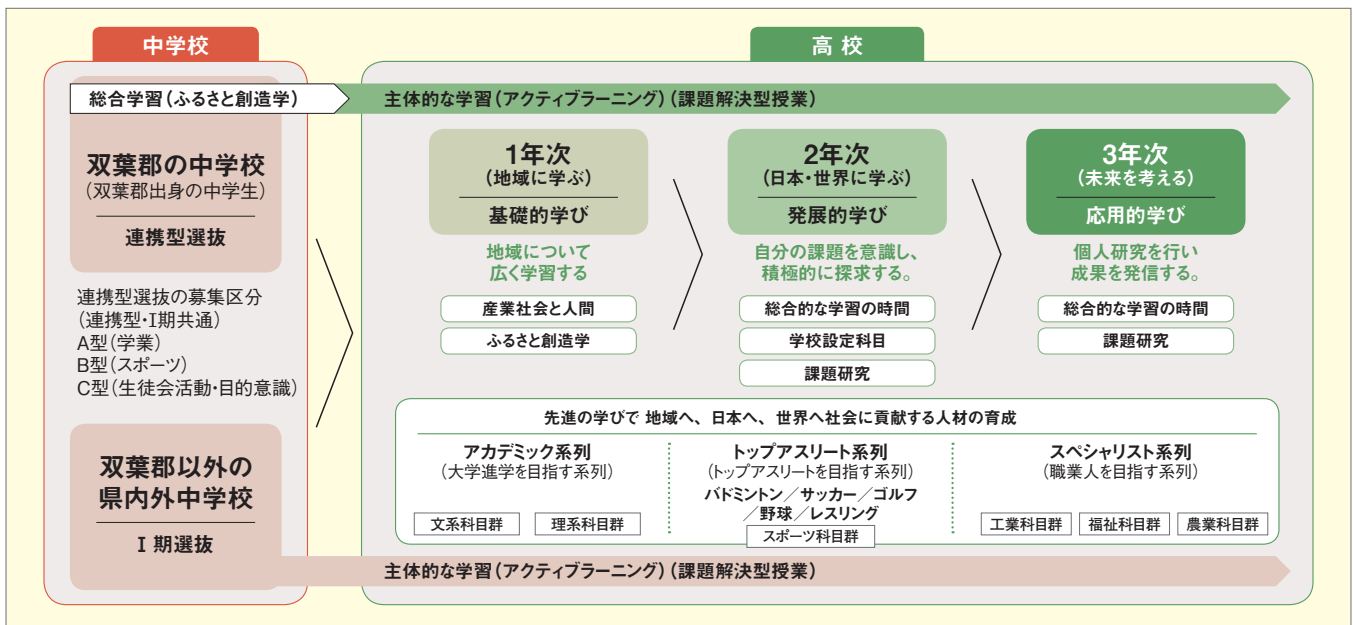
その柱が「ふるさと創造学」である。

※1 OECD事務総長の支援表明をきっかけに文科省、福島大学などの連携で実施された復興教育プロジェクト。被災地の中・高校生による2年半のプロジェクト学習で、リーダーシップや国際性などさまざまな力の育成を目指す。

※2 12年の釜石市や13年の福島市など、毎年、全国の中学校生徒会が一堂に集いアクションプランを作成。都道府県別のサミットも実施。

図2 ふたばの教育復興応援団メンバー

- 秋元 康(作詞家)
- 安藤忠雄(建築家)
- 伊藤穰一(マサチューセッツ工科大学メディアラボ所長)
- 乙武洋匡(作家、東京都教育委員)
- 小泉進次郎(復興大臣政務官、衆議院議員)
- 小宮山 宏(三菱総合研究所理事長、元東京大学総長)
- 佐々木 宏(クリエイティブディレクター)
- 潮田玲子(元オリンピックバドミントン選手)
- 為末 大(一般社団法人アスリートソサエティ代表理事)
- 西田敏行(俳優)
- 橋本五郎(読売新聞特別編集委員)
- 林 修(東進ハイスクール・東進衛星予備校現代文講師)
- 平田オリザ(劇作家・演出家、東京藝術大学特任教授)
- 宮田亮平(東京藝術大学学長)
- 箭内道彦(クリエイティブディレクター)
- 山崎直子(宇宙飛行士)
- 和合亮一(詩人)



地域の魅力を知り、復興に向けて発信する体験型の授業であり、14年度から、双葉郡の小・中学校で始めた取り組みを発展させた授業だ。1年次前期は、劇作家・演出家の平田オリザ氏を講師に迎え、フィールドワークを通して地域の良さを知り、演劇として表現する。後期は、「ふたばの教育復興応援団」(図2)から講師を招き、スポーツ、祭り、アート、音楽、ドラマといったグループごとに地域の魅力を再発見し、イベントなどを企画して発表する。年間指導計画を作成した佐藤伸郎先生(P32写真右)は言う。

「各界の著名人が、教員と共に作りあげる『責任編集授業』と呼んでいきます。スポーツであれば仮設住宅での運動不足の解消法を考えたり、アートであれば、伝統をベースにした新しい芸術作品を制作したり、音楽であれば地域の応援歌のようなものを考えて披露するといった計画が、各講師からあがっています」

講師は最低でも3回は来校し、狙いや評価を含め担当教員とともに授業を作り上げる。一過性のイベントではない「力」に結びつく授業だ。

このほか同校では、既存の5つの県立高校の特色を引き継ぐ形で、アカデミック、トップアスリート、スペシャリ

ストという3つの系列を用意(図3)。総合学科として幅広い進路を見据え、資格取得、ICTの活用、環境・防災教育にも力をいれる。また、「みらいカフェ」「みらいラボ」という地域住民が集える場所を設置。スーパーグローバルハイスクール(平成27年度)にも指定され、海外研修などグローバル教育も充実させていく。

「未来創造型教育」における3つの変革の理念

丹野校長は、20年後あるいは100年後の姿を思い描きながら学校を創ろうとしている。それが「未来創造型教育」(図1)という考え方だ。

「これまでの学校教育を根本から変えていく新しい学校の在り方を模索しています」

そのための変革の理念は3つ。

1つめは自立。これまで学校も地域もシステムに依存し、主体的になれなかった部分がある。それを根本から変えたい。例えば、知識詰め込みから脱却した主体的な学びの実現であり、解のない課題への挑戦を後押しする授業だ。

「双葉地域はまさに解のない課題だらけです。教員も生徒も地域の人も同じ地平に立って、解のない課題に挑

戦していきたいと思えます」

2つめは協働。さまざまな主体が、その違いを乗り越えて共に学んでいく。そういう場の中心に学校がなることが必要だと考えている。

3つめは創造。学校や地域も、今までの常識や概念にとらわれず価値観を転換して再出発するしかない。他の地域ではしがらみがあって叶わないことでも、ここでなら思い切っただけでできる。それがいつか、他の地域に還元できればいいと考えている。

「福島県ではまだ県内外をあわせて約12万人の県民が故郷を離れて過っています。大きな困難を抱え、未解決の課題ばかりですが、実は、震災以前から、地域には少子高齢化や産業の疲弊などの課題が山積みでした。それが震災と原発事故によって先鋭化し、世界でも稀に見る『課題先進地域』になってしまいました。でも、だからこそ、できることや、やらねばならないことがあるはず。辛い思いをしたからこそ芽生えた思いや意欲もあるわけで、それを生かしていくことも、この学校の使命だと考えています」

新校舎が完成する18年度までは、既存の中学校の校舎を使用する。同校の挑戦は始まったばかりだ。

「不可能」の反対語は「可能」ではなく「挑戦」だ

——開校を直前に控え、教職員の雰囲気やモチベーションは？

丹野▼先日、教員が初めて揃いキックオフの会を行いました。そこに、子供未来会議やOECD東北スクールなどで活動してきた高校生2人を招き、本校に期待することを話してもらいました。彼らは、「活発に動く授業、共に学び合う授業をしてほしい」「現実社会の中で学びたい」ということを語ってくれました。まさに、私たちの教育理念に共鳴するものでした。彼らの言葉を受け、「ああ、こうした教育を行い、こういう若者を育てていけばいいんだ」というイメージが共有できたと思います。

南郷▼解がない中で行動し、何かを生み出してきた子どもたちなので言葉

に重みがありました。彼らの発言を受け、校長先生が「そうした思いをこの学校の建学の礎として刻みたい」と話されたとき、私同様、奮い立った人は多いはず。先生方の意欲や地域への思いも強くグッときました。いいチームになれると思います。

丹野▼双葉郡出身で、自らも家を失い、帰宅できない教員もいますし、先生方の地域への想いはとても強い。一方で、本当にこんな教育ができるのかという不安の声があるのも事実です。私は、子どもたちの成長する力を信じてやれば不可能はないと信じています。これは挑戦であり、それぞれの持ち味を生かし、できることからやっっていくと話しています。

——1期生に期待することは？

丹野▼今の大人を超えてもらいたいです。今の学校や社会のあり方さえ変えていけるような若者に育ってほしい。そのために我々は、生徒の主体性を信じ、いろいろなことに取り組んでいきたいと思っています。

南郷▼生徒の挑戦を後押しする授業

をしていきたいです。失敗もあるでしょうが、自分で考え、判断し、挑戦したことであれば、失敗したとしても大きな力となります。失敗も許容していくような挑戦の場を作り、共に進んでいきたいと思っています。

モデルとなるような日本で一番いい学校にしたい

——20年後、どんな地域像、学校像を描いていますか？

丹野▼20年後というと1期生が36歳、ちょうど今の南郷さんの年齢です。そう、南郷さんのような青年に育ってくれていたらうれしいですね(笑)。

以前からいた住民と新しい住民が一緒にあって新しい街を作っている。その中心に学校があるというイメージです。コミュニティづくりに困っている人たちが世界中から見学にくるような、模範となる地域であり学校でありたいと思います。

南郷▼大勢の人が集い、常に街づくりについて議論し、面白いことをワイワイやっている「創造のつぼ」のような

空間になってほしいです。私は、記者会見で「日本で一番いい学校にしたい」と話しました。震災後、各地で見てきた素晴らしい実践を参考に、しっかりカリキュラムに落とし込み、全校一丸となつていい学校にしたいのです。ここでの取り組みは、日本の教育改革の先取りでもあります。校長先生が言うように、最も課題が先鋭化したこの地域だからこそできることがあるはず。他に先駆けて、さまざまなことに挑戦し、日本の教育のモデルになる必要があると感じています。



校長
丹野純一先生



副校長
文部科学省 初等中等教育局
初等中等教育企画課 専門職
南郷市兵先生